

ハーン家と18世紀アイルランドにおける「チャーター・スクール」運動⁽¹⁾

小 村 志 保

1. はじめに

(1) アイルランド史とハーン家

これまで何度か機会を得て指摘してきたように、『怪談』などの著作で知られるラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904、日本名小泉八雲) の父方の家族のアイルランドにおける歴史については、種々の誤った記述がそのまま「歴史」として無批判のまま長い間受け入れられてきた。これはアイルランド史への理解の無さ、あるいは関心の低さがその理由となってきたことは否めない。しかし私がアイルランド史の視点から新たに調査したところ、たとえばそれまでハーン家の祖先だと信じられていた人物が架空の人物であったことや、ラフカディオの四代前の先祖にあたるダニエル・ハーン (Daniel Hearn, 1693-1766) が、アイルランド総督の私的牧師としてイングランドから随行してきたのがハーン家のアイルランドにおける始まりだという説は、様々な証拠から否定されるべきものであることなどを明らかにすることができた⁽²⁾。その後も現地での活動も含めてハーン家に関する調査を行ったところ、18世紀アイルランドの様相を探る上でも興味深い事実が判明した。

まず初めに、簡単にラフカディオ・ハーンの父方の家系を振り返っておくと、父チャールズ・ブッシュ (1818-66) がイギリス軍の軍医、祖父のダニエル・ジェイムズ (1768-1837) が陸軍中佐を経てアイルランド・ウェストミーズ州の治安判事と州長官を歴任、曾祖父のロバート・トーマス (1734-92) が中尉、さらにその父ダニエルがアイルランドにおける英国国教会組織であるアイルランド国教会 (Church of Ireland) で聖職に就いていた。これは明らかにハーン家がアイルランド史において「プロテスタント・アセンダンシー」と呼ばれる、人口では少数派のイングランド系プロテスタント支配層に属していたことを示している。17世紀初頭以降本格化したイギリスによるアイルランドへの植民と、17世紀末以降約百年間にわたってカトリック教徒に科された刑罰法 (The Penal Laws) によって、18世紀のアイルランドではプロテスタント支配は強固なものとなっていた。

このような経歴から安易に推定して、ハーン家は宗教改革以降にイングランドから移住してきたいわゆる「ニュー・イングリッシュ」に属していたと考えられてきたわけだが⁽³⁾、私が以前指

摘したように、今のところハーン家の歴史において遡る事のできる最も古い人物のダニエル・ハーンはアイルランド生まれであると考えてよく、したがってダニエル以前に「プロテスタントの」ハーン家がイングランドから移住したか、あるいはそれよりもっと以前に「カトリックの」ハーン家が移住してきて「オールド・イングリッシュ」と呼ばれる集団に属していた、もしくはもともとハーン家はアイルランド出身であったが、どちらの場合にせよある時点で改宗したという可能性も十分に考えられる⁽⁴⁾。この点については調査を重ねてきたが、アイルランド史研究を志す者の誰もが抱える問題である史料的限界もあり、判然としない⁽⁵⁾。一方でこれまでに入手し得たものと新たに発見した史料を改めて精査したところ、大変興味深い事実が判明した。アイルランド国立図書館内の家系局に保管されているハーン家に関する史料を見ると、ダニエル・ハーンの二番目の妻で1732年に結婚したアン・ダウリー（Ann Dowley）の妹ハンナの夫にウィリアム・ヘンリー（William Henry、?-1768）という、ダニエルと同じくアイルランド国教会の聖職者であった人物がいる⁽⁶⁾。つまりダニエルとは義兄弟の関係にあった人物だが、これまでのハーン研究においては完全に見過ごされた存在であった。しかしこの人物について調査を進めると、アイルランド史研究においても貴重な存在であることがわかった。そこで本稿ではダニエル・ハーンとウィリアム・ヘンリーの二人の聖職者の経歴と活動を通じて、18世紀アイルランドの様相を探ることとする。

(2) ダニエル・ハーン（1693-1766）

ダニエル・ハーンについて既にわかっていたことを簡単に振り返っておきたい。ダニエルはトリニティ・カレッジ・ダブリンにおいて、1713年に学士、1718年に修士の学位を取得している⁽⁷⁾。トリニティ・カレッジ・ダブリンは1592年の創立以降プロテスタント教徒のみが入学を許されており、カトリック教徒が制限付きながら入学を許可されたのが1793年、宗教に関するすべての制限が撤廃されたのが1873年である一方、アイルランドのカトリック教会が信徒のトリニティへの入学を公に「許可」する宣言をしたのが1970年になってからであったことからわかるように、極めて宗派色の強い大学であった⁽⁸⁾。その後ダニエルは遅くとも1727年までにはアイルランド南部マンスター地方のティペラリー州、エムリー（Emly）教区の受禄聖職者となっており、翌年には隣接するキャッシュル（Cashel）教区の副主教となって1766年に亡くなるまでその地位にあったとされ、ダブリン市中心部にある聖アン教会に埋葬されたとの記録がある⁽⁹⁾。また家系局の史料から実際に居住していたのは任地ではなくダブリン市内中心部であったこともわかっていた。

以上までが従来判明していたダニエルに関する情報だが、今回アイルランド国教会が保管している史料の調査を行ったところ、これまで知られていなかった聖職者としてのダニエルのより詳しい経歴を明らかにする史料を発見した。1727年以前の足跡はこれまでまったく不明だったのだが、この史料によればまず1721年から1726年までアイルランド中西部のリートリム州アーダー

(Ardagh) 教区のアナダフ (Annaduff) の教会区司祭、その後1726年から1733年までは中部オファリー州のキラン (Killan) の教会区司祭であったことがわかった。それから周知のように1727年にはエムリー教区の受禄聖職者、その翌年から1766年までキャシエル教区の副主教であったわけだが、さらに明らかになったのは、この時期同時に、1740年から1766年まで中部キャバン州のドラング (Drung) とララ (Larah) 教区の教会区司祭も務めていたことである⁽¹⁰⁾。

(3) ウィリアム・ヘンリー (?-1768)

次にダニエルの義弟にあたるウィリアム・ヘンリーについて述べたい。家系局の史料にはダニエルの妻アンの父はマーカス・ダウリー (Marcus Dowley)、母はアビゲイル (Abigail) となっており、アンの他にエリザベスとハンナという二人の娘がいた。そのうちハンナの夫が「ウィリアム・ヘンリー師」とだけ記されている⁽¹¹⁾。そこで聖職者であることを手がかりにして、この人物についてもアイルランド国教会にある史料で調べたところ、「おそらく1738年4月14日にマーカス・ダウリング (Marcus Dowling)⁽¹²⁾ の娘と結婚した『ヘンリー師』である」との記録が残っていた⁽¹³⁾。さらに公文書館所蔵の結婚許可証に関する記録を見ると、「ダウリー家の娘アンが1732年にダニエル・ハーン師と、娘ハンナが1738年にウィリアム・ヘンリー師 (Rev. William Henery) と、息子リチャードが1728年にサラ・ファラハン (Sarah Farahan) と結婚した」とあり⁽¹⁴⁾、これは国立図書館の家系局にあるダニエル・ハーンの結婚許可証に関する記録とも符合するので⁽¹⁵⁾、つづりに多少のばらつきはあるものの、二人が義兄弟の関係にあると判断した。

さてこのヘンリーもまたトリニティ・カレッジ・ダブリンの卒業生であるが、学位を取得したのは1748年と1750年と、後年になってからである⁽¹⁶⁾。アイルランド北部アルスター地方のドニゴール州がファーマナー州の生まれではないかとされるが、生年もはっきりしない⁽¹⁷⁾。聖職者としての経歴は1731年から1740年まで北西部キルモア (Kilmore) 教区キルシャー (Killesher) の教会区司祭、1740年から1768年までが北部デリー (Derry) 教区アーネイ (Urney) の教会区司祭、また1761年から1768年には西南部キラロー (Killaloe) 教区の首席司祭となったとの記録がある。また居住地に関する記録は無いが、ダニエル・ハーンと同じく聖アン教会に埋葬されたとの複数の記録があることから、ヘンリーもダブリン市内に実際の住まいがあったものと考えられる⁽¹⁸⁾。

ヘンリーについて調査を進めていくと、これまでこの人物が見過ごされていたことが不思議なほど大変注目すべき人物であるとわかった。彼は現在残っているだけでも二十以上の著作を残しており、それらは教会での説教にとどまらず⁽¹⁹⁾、アイルランド北西部の地誌⁽²⁰⁾や禁酒運動を推奨するもの⁽²¹⁾など、多岐にわたる。これらについては後に触れることとするが、ダニエル・ハーンとウィリアム・ヘンリーの二人に関するこれらの新たな事実が興味深いのは、当時のアイルランド国教会の様子をよく物語っているからである。アイルランド国教会は1537年から1870年までアイルランドの「国教」であったが、その信徒は常に圧倒的な少数派であった。ダニエルの時代の

教会の状況について考えるならば、1697年に当時ミーズ（Meath）教区の主教だったアンソニー・ドッピング（Anthony Dopping, 1643-97）による報告がそれをよく伝えている。ドッピングは教会にとっての主たる問題は「聖職者の不足」「プロテスタント住民の不足」「聖職者による教区兼務と教区不在」「教会の建物の荒廃と不足」だとしているのだが⁽²²⁾、事実この二人も複数の教区を兼務したうえ、実際の住居はダブリン市内にあったと考えられる。こうした状況が当時の国教会と聖職者の活動の低迷や腐敗を示すものとの考え方がある一方、聖職者が任地に住むことが稀だったのは、交通の便の悪さや、必要な生活物資が確保できる規模の町が国内に少なかったこと、また教区の兼務に関しても、一つの教区からの収入だけでは生活するのが困難だったなど物理的な要因があったとの考えもある⁽²³⁾。いずれにせよ、この新たに発見した二人に関する記録は、18世紀当時のアイルランド国教会が抱えていたとされる種々の問題を裏付ける経歴だと言ってよく、さらには「プロテスタント人口の不足」は、これから述べる二人が関与していたある運動にとって、決定的な要素であった。

2. 「チャーター・スクール」運動

(1) 「チャーター・スクール」運動の始まり

上記の二人について調査を進めていくと、両者とも Incorporated Society in Dublin for Promoting English Protestant Schools in Ireland という団体に属していたことがわかった。この団体は1733年に設立されたのだが、ウィリアム・ヘンリーはこの設立の年に、またダニエル・ハーンはその翌年にそれぞれ「献金者」として名を連ねている⁽²⁴⁾。設立に直接かかわった会員ではないもののその後すぐに会員となったことが記録されており⁽²⁵⁾、この団体の活動に初期からかかわっていたことになる。

18世紀初頭のアイルランドでは、主に国教会の聖職者によって慈善学校を運営するいくつかの団体が作られたが⁽²⁶⁾、上記の団体の場合はアイルランド国教会組織の最高位であるアーマー教区大主教の座に当時就いていたヒュー・ボルター（Hugh Boulter, 1671-1742）の主導によって作られた。1724年からアーマー大主教の座についていたボルターは、当時のアーマー大主教がすべてそうであったようにイングランド出身であり、アイルランド総督と密接な関係を保つばかりでなく、総督が不在の時にはその代理も務めていた。ボルターは1730年に請願運動を始め、その年のニューカッスル公宛の手紙には「この国の旧教徒の数はあまりに多いので、彼らをあらゆるキリスト教的方法でアイルランド国教会に導くことが、この国でのプロテスタントの利益のために最も必要なこと」であるが、「成人の旧教徒の無知と頑迷さは甚だしく、彼らを改宗させられる希望はあまりないが、もし子供たちに英語とキリスト教の真理を教えるための多くの学校を建てることできれば、これから成長する世代に善を施す希望がある」ので、「私や他の主教の名のもとに、我々が望む勅許状が得られるよう援助してくださることを望む」と記している⁽²⁷⁾。そし

てこの年、国教会の聖職者や貴族ら百人以上の署名と共に請願書は提出された⁽²⁸⁾。

1733年にはジョージ二世の勅許状（Charter）によってこの団体の設立が許可され、そこから「チャーター・スクール」と呼ばれることとなった。設立以降常に五百人前後の国教会の聖職者やプロテスタントの貴族・紳士階級からなる会員を保ったこの団体の活動は、主に貧しいカトリック教徒の家庭の子供を彼らの母語であったアイルランド語ではなく英語で教育し、アイルランド国教会の教義などを教えるための「チャーター・スクール」を設立、普及させることを目的としていた。この「チャーター・スクール」では六歳以上の男女が寄宿生活を送って農業、紡績などの職業訓練を受け、その後プロテスタント教徒の主人のもとへ奉公に出される仕組みとなっていた。また「チャーター・スクール」の運営はこの団体の会員による寄付金の他に、イングランドに住む「通信会員」からの寄付金、さらには議会からの補助金などの公的資金によって主にまかなわれることとなる。勅許状には、当時のアイルランドの状況について「アイルランドからの請願書による情報では、ほとんどの地域で旧教徒の数がすべてのプロテスタントの宗派を合わせた数を大幅に上まわって」おり、「もし何か効果的な方法でこの大勢の人々を真の宗教と忠誠心のもとに導かなければ、迷信と偶像崇拜、そして我々や我々の子孫（筆者注：英国系住民）への不信とが何世代にもわたって彼らの間で受け継がれるだけで、ほとんど希望が無い」とされている。そして「これらの愚かな人々を改宗させて文明化し、良きキリスト教徒かつ忠実な臣民にするために取るべき適切な方法は、十分な数のプロテスタント学校を建設・設立して、そこでアイルランド原住民の子供を英語で教育し、かつ真の宗教の基本的な教義を教えることだと考えられてきた」が、これまではそれに十分な施設が無く、今後「もしプロテスタント学校に効果的な援助が与えられなければ、この増大する悪を矯正することはできないだろう」としている⁽²⁹⁾。

翌1734年には「チャーター・スクール」に関する具体的な規則が作られた。それらは「アイルランドの四地方のそれぞれに一つずつ学校を建て、資金が増えれば各州に一つまたはそれ以上の学校を建てること」「チャーター・スクールの付近に住んでいる団体会員は地方調査委員となって学校の監督と運営の権限を与えられ、地方委員はダブリンの十五人委員会（筆者注：団体の責任者）に報告する」「プロテスタント教徒として認知され定評のある者でなければ学校長にならない」「学校に収容される子供は旧教徒の、または他宗派の貧しい子供たちで、無料で指導を受ける」「すべての子供は衣類を与えられ、英語の読み方を習い、地方委員がふさわしいと判断する子供には書き方と算数を教えるが、これらは一日二時間以内として他の時間は労働にあて、奉公に出される時のことを考えて特に麻の製造業に力を入れる」「ふさわしい年齢に達した子供は、プロテスタントの主人の下へ団体の資金で奉公に出す」「学校長は既婚者、または年長でしらふ、かつ節度のある生活を送っている者に限り、地方委員会か教区の牧師に苦情があったり、職務怠慢が認められれば職を解かれる」「女性の学校長はすべて既婚者で自身が幼児を持たない者、または威厳ある未婚者で四十歳以上、女子を奉公に出す準備として紡績や家事一般の知識のある者

に限る」など多岐にわたる⁽³⁰⁾。

(2) 'The State of Popery'

さてこの「チャーター・スクール」運動の背景にあった「あまりに多いカトリック教徒の数」とは、実際どの程度だったのだろうか。正確な数を知るのはもちろんできないが、参考となるのは1732年から1733年に行われた暖炉税の記録をもとにした世帯数の調査である。それによれば、アイルランド全土の世帯数38万6,902のうち、家長がプロテスタントの家庭が10万5,501、カトリックの家庭が28万1,401（73%）であり、約3対8の割合であるとされた。またアイルランド全土の人口は各家庭が5人で構成されていると仮定して193万4510人だと推定している⁽³¹⁾。しかし、たとえば家長がプロテスタントでもカトリック教徒の使用人を雇っている場合や、遠隔地にある家庭や税の免除されている家庭が調査からもれてしまうことなどを考慮に入れなければならない、この調査結果は実際よりも少ない世帯数しか反映していないと考えられている。現在この調査をもとにしたある推定では、1732-3年当時の全世帯数は51万4,500、全人口は210万から250万で、うちカトリック教徒が家長だったのは40万9,000世帯（79%）⁽³²⁾、また別の推定では全世帯数は58万353、全人口は300万以上とされている⁽³³⁾。いずれにせよこれは、1560年代の南部マンスター地方や1607年以降の北部アルスター地方のような大規模なものから他地域での小規模なものまで、16世紀半ばから17世紀末にかけて何度もイギリスによる植民計画が実行され、さらには1695年以降数々の「刑罰法」によってカトリック教徒の生活には様々な制限が科されてきたにもかかわらず、1672年のウィリアム・ペティによる「プロテスタント教徒が30万人に対しカトリック教徒が80万人」という報告から、アイルランドの状況がほとんど変わっていないことを示している⁽³⁴⁾。

またこの当時の国教会やプロテスタント住民の懸念は、カトリック教徒の数だけでなく、カトリック教会や神父たちの勢力が衰えていないことにもあった。アイルランド上院議会は1731年、全土の州長官や治安判事に自らの担当地域にいくつの男女修道院があり、そこに何人住んでいるのかを、また国教会の大主教と主教には自分の教区にいくつのカトリック教会があり、そこで儀式を行っている神父が何人いるのか、また男女修道院と思われる場所やカトリック教徒による学校の数はいくつあるのかを報告するようにとの命を下し、後に「全土にわたる旧教徒の大いなる傲慢さを認めざるを得ない」と報告している⁽³⁵⁾。以降 'The State of Popery' の名で知られることとなるこの報告は1731年に出版された後、1747年に「Incorporated Society in Dublin for Promoting English Protestant Schools in Ireland」の通信会員は、アイルランドにおける旧教徒の勢力は当時（1731年）恐るべきものであったこと、そしてそれ以降も衰えていないことを懸念すべきだと確認する権限がある」としてロンドンで再出版されている。

この報告によれば、調査からもれている地域や、調査の正確さに疑問のある地域もあるものの、1731年当時アイルランドには少なくともカトリック教会と認められる建物が892（他に小屋、物

置や可動式祭壇が100以上)、個人礼拝堂が54あり、神父は1445人、男子修道院は51あって修道士は254人、女子修道院は9、カトリック教徒による学校⁽³⁶⁾は549あったとされる。そして教会、聖職者、学校の数において国教会と大差があり、これがアイルランドにおいて旧教徒勢力が維持され拡大してきたことを十分に示すものだとしている。また報告のあった教会のうち229はジョージ一世期以降に建てられた新しいもので、なかには立派な建物もあることや、神父たちは「控えめな態度もほとんど無く」どんな場所でも姿が見られ、「旧教徒たちはプロテスタント教徒と同じように公然と教会へ行く」ので、国教会の聖職者たちが自らの教区についての報告をするのは容易だった、ともしている⁽³⁷⁾。

したがってこの時期には既に、少なくともカトリック教会と聖職者に対する刑罰法は機能していなかったと考え得る。1695年に出された最初の刑罰法のひとつにおいて、カトリック教徒が教育を受ける目的で海外に行くこと、また国内でも学校を開いたり教師になることが禁止されており⁽³⁸⁾、カトリック聖職者については1697年に出された刑罰法⁽³⁹⁾ ('The Bishops Banishment Act') で、すべての修道会所属の聖職者、司教、司教総代理は1698年5月1日までに国を去ることが求められた。この法は当初厳格に施行され、1698年には424人の修道会所属の神父が国外追放となっている。この法が「もし完全に守られていたら、神父の任命が行えなくなるためにカトリック神父は徐々に姿を消しただろう」が、実際にはアンの治世(1702-14)の終わり頃までには14人の司教がアイルランド国内に確認されるなどしてカトリック教会にとって危機的な状況は去っており、再び厳格に法が適用されることもなかった⁽⁴⁰⁾。そして1720年代には「プロテスタントの聖職者も住民も、カトリック聖職者を対象とした法は機能していないと認めなければならず」、彼らの「カトリック問題」に対する意見は「より厳しい法律を要求する」か「刑罰法を廃止して何か他の方法に代える」かに二極化される状況となった⁽⁴¹⁾。

(3) 初期の「チャーター・スクール」運動

以上のような状況下で始まった「チャーター・スクール」運動は、まさに「何か他の方法」のひとつであり、1734年には早くも最初の学校が建設されている。この年の議事録で注目すべきなのは、当初の規則には無かった項目が新たに付け加えられている点である。そのなかでも最も重要なのは、「十分な数の学校が建設された時には、子供たちをひとつの州から他の州へと移送(transplant)する」という項目である。この方針の理由は「そうすれば子供たちは誤った道に導こうとする旧教徒の親や神父の影響から逃れられるかもしれない」からで、さらに「巨大な悪をより効果的に妨げるために、親か近親者が学校や奉公先から子供を取り返した場合は5ポンドの罰金を払うという契約を結ばない限り子供を学校には受け入れない」という規則も加えられている。そして「旧教徒の親たちは子供たちを受け入れて欲しいとひざまずいて懇願し、決して取り戻そうとはしないと約束している。彼らの貧しさはあまりに深刻なので、子供たちに衣食住と

教育が与えられ、適当な年齢になれば将来の生活の糧を得る道に進ませてもらえるこの条件以上に良い方法はないと考えて」おり、「この最も優れた方策がウィリアム王のアイランド制服以後数年のうちに終わって行われれば、アイランドの下層民は今頃良きプロテスタント臣民となっていただろうし、彼ら生来の怠惰と無為は、労働と勤勉さに若年時から慣れることで治癒されただろう。またこの方法によって、何千もの無力で不活発な貧民は、有益な地域の一人となり得ていただろう」⁽⁴²⁾ とこの団体の活動の有効性を強調している。

実際「初期のチャーター・スクールに対するプロテスタント教徒の熱狂と、宗教と社会の状況を変える効果的な手段をついに見つけたという確信」⁽⁴³⁾ は団体の議事録以外にも多々示されている。たとえばこの団体の創設者ヒュー・ボルターは、数年前までアイランド総督でもあったドーセット公への1737年5月の手紙に、「この国のほとんどが苦しんでいる不幸な無知と旧教への執着、そして彼らを蝕んでいる過度な怠惰さは、閣下が最もよくご存知です。そしてこの団体が貧しい旧教徒の子供と、最も卑しいプロテスタントの子供たちに、キリスト教の知識と役に立つような仕事とを教えるための学校を建てることによって今成し遂げている前進は、この国に改革をもたらすために試みられたもののうちもっとも理にかなった手法であると確信しています。そして我々の計画がより知られるようになるにつれて我々の資金は増えており、またこの国のいくつかの地域の紳士たちからは、彼らの土地にこのような学校を建てたいと、土地やその他の援助を提供する申し出が日々届いています」と記している⁽⁴⁴⁾。

そして、ハーン家の一員であったウィリアム・ヘンリーもまた「チャーター・スクール」運動への熱意を度々表している⁽⁴⁵⁾。

刑法によってではなく、優しさと導きという真のキリスト教徒にふさわしい、かつ慈悲深い方法によって、アイランドをプロテスタントで勤勉な国にするこの計画は、人間の心にかつて芽生えたなかで最も崇高なものである。しかし最初の小さな粒がまかれた時には、1733年10月24日に勅許状が出されてからのこれ程短い時間に華々しく成長し、毎年885人の貧しい旧教徒の子どもを教育して援助し、そのうえさらに500人を受け入れるための学校を建設するまでになると信じるには奇跡的な意志が必要だった。…ただその資金は主にイングランドから提供されているということに感謝に満ちた心で認めなければならない。

また1753年にも「チャーター・スクール」運動の広がりについて述べている⁽⁴⁶⁾。

まるで神の御業のように、勅許状を頂いて以来19年の間にそれは根付き、福音書の「一粒のカラシ種」のたとえの如く発展するまでに神の恵みを受けてきた。学校はすべての地域に建てられ、まったく無力であった子供たちを今1500人収容している。彼らのうち毎年300人は

真のプロテスタントの教えと勤勉さを身に付けて国の隅々へと旅立つ。

このように「チャーター・スクール」運動は「熱狂」と共に始まり、「その信奉者たちはアイルランドの諸悪を是正する手段」としてこの活動を捉えていた⁽⁴⁷⁾。この活動にはアイルランドとイングランドでの献金の他に公的資金も供給され、次第に資金面でも充実することになった。学校は次々に建設され、団体の議事録によれば1730年代末には14校、1740年代末で34校と増加し、1763年には49校にまで増えたが、その後は新たに建設される学校がある一方で閉鎖される学校も出始め、学校数としては49校（1763-8年）が最大であった。また各学校は20人から40人の子供を収容しており、最も多かった1760年代には2000人以上の子供を収容していたと記録されている。

ここでダニエル・ハーンの活動について見てみると、副主教となっていたキャシエル教区に「チャーター・スクール」が建設されたのが1751年9月29日で、これは35番目に建てられた学校となった。この翌年には男女20人ずつの子供が収容されているとの報告がされている⁽⁴⁸⁾。そして1766年出版の議事録までこのキャシエル校への「年次寄付者」としてその名を連ね、毎年3ポンドの献金を行っていたことが記録されている⁽⁴⁹⁾。しかしより深くこの活動にかかわっていたのはウィリアム・ヘンリーのほうである。ヘンリーは、1759年に出版された議事録には「1758年11月1日よりダブリンの十五人委員会の一員」に選ばれたことが記録されており⁽⁵⁰⁾、1767年出版の議事録まで「十五人委員会」の一人として名を連ねていて、おそらくはこの翌年に亡くなるまでこの地位にあったと考えられる⁽⁵¹⁾。「十五人委員会」はこの団体の意思決定機関であって、子供の受け入れ方針や奉公先の選択、学校長の任命など、「チャーター・スクール」の運営にかかわる権限をすべて掌握していた。つまりヘンリーはこの団体の中枢部にいて、その活動を推進する立場にあったのである。

(4)「チャーター・スクール」の子供たち

プロテスタント住民の期待を背負った「チャーター・スクール」だが、収容されていた子供たちはどのような子供だったのだろうか。当初の勅許状や規則では必ずしも明確にカトリック教徒の子供のみを対象にしていたわけではないが、1745年以降はカトリック教徒の子供のみを受け入れることが運営の方針とされた⁽⁵²⁾。入所していた子供たちについて考える時、「チャーター・スクール」運動が始まった頃のアイルランドの社会状況を考慮に入れなければならない。18世紀を通してアイルランドでは貧困層の食糧難は深刻だったが、特に1728年から1729年⁽⁵³⁾にかけてと、1740年から1741年⁽⁵⁴⁾にかけての飢饉は深刻だったため、少なくとも「食事と家が確保できる」からと子供を「チャーター・スクール」に預ける場合のあったことは想像に難くない⁽⁵⁵⁾。しかし実際に「チャーター・スクール」に収容された子供たちの多くは「ホームレスか望まれない子供」⁽⁵⁶⁾であったようだ。1749年には「この国のほとんどすべての地域で物乞いをせざるを得ない大勢の

子供がおり、彼らの教育に適切な措置が取られなければ、非生産的なだけでなく、国にとって危険な存在になる」ので、この団体に適切と判断する人物を任命して「物乞いをしている、あるいは物乞いをしている人物に連れられている 5 歳から12歳と思われる子供はすべて身柄を確保」し「都合の良いチャーター・スクールへ移送する」権限を与えるという法令⁽⁵⁷⁾も作られており、やはりこのような子供が入所の対象であったと考えられる。

ところが1742年の議事録には既に、「子供たちの中には方法を見つけて親元へ帰ってしまい、元の野蛮な生活に戻ってしまう」者もいるとの記録があり、この問題に対しては「子供たちを親や親族から遠く離れた学校に移送し、すべての交渉を絶つ」という「賢明で効果的な対策」が「既に何度か実行され、その正しさが成功により証明された」としている⁽⁵⁸⁾。しかし1744年にも「子供たちの脱走という大いなる危険を取り除くために、彼らを誤らせる旧教徒の親や親族から遠く離れた学校に子供たちを移送するよう、我々は細心の注意を払っている」とするなど、脱走は頻繁に起きていたことがうかがえる。さらにはこの年までに既に、この施設に対してカトリック教会が反発を示し、対抗措置を取り始めていたことも記録され、「衣食の欠乏から命を落とさないようにと子供をチャーター・スクールに預けた親に対して最近、聖体拝領を拒み、許しの儀式を断った神父たち」がいたと記している⁽⁵⁹⁾。そして1757年にはこの団体は「飢餓の時以外には学校に十分な数の子供を確保できない」ことを認めるに至る。「規則によって 6 歳以下の子供を受け入れられないのだが、その年頃には子供たちは親にとって役に立つようになる。しかし 6 歳以下の子供を300から400人受け入れるための乳児院を作ることができるならば、そこから学校に子供を常に供給できるようになると我々は考える」として、この団体による乳児院の設立の許可を求める請願をアイルランド下院議会に提出している⁽⁶⁰⁾。翌日にはこの請願は認められ、アイルランドの四地域に各一つ、それぞれ100人の 6 歳以下の子供を収容するための乳児院を建設する許可を得た⁽⁶¹⁾。その後1760年から1762年にかけて三つの乳児院が建設されたがアルスター地方には資金難から作ることができず、以前からあったダブリンの乳児院と合わせて四つの乳児院を運営することとなった。しかし同時にこの時期以降閉鎖される「チャーター・スクール」も出始め、「十分な数の学校がないという不満の一方で、子供の数が足りず」「飢饉の年は団体にとって有利に働くように見えたが、実は子供に食糧を与えるのにより多くの資金が必要になる」⁽⁶²⁾などの問題を抱えることになり、開始から三十年足らずでこの運動はつまづくことになる。

さてこの「チャーター・スクール」の子供たちの様子については、この運動の開始以降五十年程の間、議事録以外にはほとんど記録が残されていない。しかしわずかに残っている新聞記事等によれば、この運動の初期にはその成果が強調され、1743年 6 月には次のような記事が発表されている。

キルマロック（リムリック州）のチャーター・スクール地方委員会からの報告では、旧教徒

を両親に持つ14歳のエレノア・バーダンは、この学校に受け入れられた時には英語を話すことができなかった。最近病にかかり死の危険もあると思われたので、父親か母親を呼んで欲しいかと尋ねると、神父を連れて来るかもしれないので呼ばないで欲しい、プロテスタントの教えを捨てるようそそのかされるより、両親に会わないまま死にたい、と答えた⁽⁶³⁾。

「移送」された子供を家族が取り戻そうとした事件も報道されている。

ゴールウェイ、9月9日。先週木曜日（5日）マラキー・ハニーが市長代理ジェイムズ・シー氏によって捕らえられ市刑務所に収監された。チャーター・スクールの輸送車からダブリンに送られようとしていたニコラス・ハニーを助け出し、連れ去ろうとしたためだ⁽⁶⁴⁾。

議事録には「対策が取られている」とされてはいたものの、以上のような家族や神父による子供の「救出」や、子供自身による「脱走」は頻繁に起きており⁽⁶⁵⁾、こうした「チャーター・スクール」の実態が初めて公に明らかにされるのは、1784年のことである。

(5) ジョン・ハワードの報告

イギリスの刑務所改革活動家ジョン・ハワード（John Howard, c.1726-1790）は1779年、アイルランドを刑務所視察のために訪れる。その際いくつかの「チャーター・スクール」を「団体の要求に応じて1781年出版の議事録を携えて」訪ねている。そしていずれもダブリンに近い男子用のクロンターフ・ストランド校と女子用のサントリー校を訪ね、「議事録には前者に100人、後者には40人収容と記されているのに、実際には前者に46人、後者に34人しかおらず、大いに驚いた」とし、他に訪ねた学校も同様の生徒数の水増しがあることを指摘している。また子供の衣食のために割り当てられる資金が少なすぎるので「私の訪ねたほとんどの学校の状況は、プロテスタンティズムの名を汚し、アイルランドでカトリック教を助長するほどにひどく」「これらの学校は徹底的な議会による調査」に値するとしている⁽⁶⁶⁾。

その後1787年から翌年にかけて何度かアイルランドを訪ねたハワードは再び報告書を出版している⁽⁶⁷⁾。この報告書では各校について詳細が記されており、良い環境にあった学校もいくつかあるものの、ほとんどは劣悪な環境にあったことがわかる。そのひとつを以下に挙げる。

ロッホリア校。1788年4月3日、女子40人。この不潔で病気の子供たちは靴も靴下もなく、小石の敷き詰められた寒い部屋で糸紡ぎと編み物をしている。助教師は（いくつかの他の学校と同様に）棒を手に立っており、子供たちの働きぶりを見張っている。一冊も本がない。16のベッドしかない。シーツが必要。診療室はじゃがいも置き場だ。子供たちは酔っ払いの

女校長に悲しくも放置されている。しかし火のそばにいる彼女自身の子供たちは健康で清潔だと、私は気付いた。

ハワードの報告を契機に1788年4月には、アイルランド下院議会に「チャーター・スクール」の運営に関する調査委員会⁽⁶⁸⁾が作られ、ハワード自身も委員会で証言している。ここでも自らの視察の詳細を伝えたうえで、「学校の多くは修理もされず、荒廃しており、子供たちは衣類も食事も教育も与えられていない。サントリー校にいた子供たちは、6年いたバリキャッスル校から連れてこられたのだが、文字を読めない。学校の劣悪な状況のため子供が集まらない。学校長個人のために子供たちを働かせ、勉強はおろそかにされている。子供たちは全般に病気がちで顔色が悪く、このような惨めな子供たちは社会全体にとっての恥である」と、そのあり方を批判している。さらにこの委員会ではアイルランドの刑務所監督官で医師でもあったサー・ジェレマイア・フィッツパトリック (Sir Jeremiah Fitzpatrick, c.1740-1810) も報告を行い、ハワードと同様、「チャーター・スクール」の劣悪な実態を証言した。フィッツパトリックは1786年から翌年にかけて28校を訪ね、「子供たちは病弱で、多くが疥癬ややけどなどを患っている。この国の貧民の子供たちの驚くべき特徴として、彼らはどんなに身なりが貧しくても体は強健なのだが、それがチャーター・スクールの子供には見られない」のは、質の悪い食事や、紡績の仕事によって健康を損ねるためだとしている。また各校についての詳細な報告も行っている。

キルケニー校、1785年2月12日、学校長ジョン・マギン。この施設は市中心から1マイルの所にある。32人の子供がいるが、その多くは体がかなり小さく、ほとんど全員がみすぼらしい様子だ。その惨めさは裸足でぼろをまとっていることでより強調される。男子だが毛羽立てと糸紡ぎの仕事をしていた、寒い作業部屋で腰掛や石の椅子に座っている。私が訪ねた日の朝には雪がひどく降ったのにもかかわらず、子供たちが作業をしている部屋には火がなかった。ただ火をおこす準備だけはできていた。私は「なぜ火をおこさないのか？」と聞いた。すると子供の仕事を監督していた人物が(怒った調子で)「なぜ火をおこしておかなかったのか」と子供たちに火をおこすように言った。二人の子供が恐怖を顔に浮かべて立ち上がり、すぐに指示に従った。施設の状況を調べ、ベッドは信じ難いほど不潔で教育はまったくおろそかにされ、多くの子供に疥癬とやけどがあることを確認して、立ち去った。しかし私が歩いて敷地を離れる間に、すでに水をかけて火が消されるのを見たので、子供たちは火の恩恵に長い間はあずかれなかっただろう。公の慈悲の対象である哀れな子供たちへのこの野蛮な扱いを見たことが、チャーター・スクールの調査を続ける最初の主要な動機となった。

チャールビル校(コーク)、1786年1月2日、学校長アンドリュー・レイトン。私がここに

着いた時、天候は非常に悪く雪が20インチ以上積もっていた。17人の男子と9人の女子がいたが、皆ぼろをまとっていた。私は自分の召使を離れた所に待たせておいて、この建物を唐突に訪ねたが、これは学校長に視察が来るのを気付かれないようにするための私のいつものやり方だ。この用心のおかげで私は、二人の幼い女子が教室の机の上に座っているのを目にすることができたが、その部屋は湿っていて床は土、火もない。二人は暖を取るためにその小さな足をお互いのベチコートの下に入れていた。同時に10歳の女子はひどい寒さから一時でも解放されるようにと、幼児の妹の指に息を吹きかけていた。すべての部屋の窓は壊れ、ベッドは不潔。施設内に子供が使うための紙は一枚もなく、教育は完全に放棄されている…

このように「チャーター・スクール」の実態が明るみになったものの、ハワードが1784年に求めた「徹底的な議会による調査」が行われるのは、四十年以上も経た1825年のことであった。

(6)「チャーター・スクール」の終焉

1801年のイギリスとの併合を経た後は、英国下院議会によってアイルランドの教育に関する調査が行われた。1809年の委員会報告では「ハワード氏の指摘以降も学校の状況はほとんど改善されていない」とし、以下のように述べている。

我々はこの施設のために貢献し、その成功のために尽力した人々の敬虔で愛国的な努力に対しては心から真摯に称賛するが、長きにわたってその設立の意図にかなうことができず、この施設に期待されていたひとつの重要な目的、すなわちアイルランドの下層民を旧教から改宗させること、に失敗したと言わざるを得ない。この目的に対する施設の無力さの度合いは、他の目的とは別に言及するに値する。旧教徒の子供の数はすべての学校を合計しても一時に1500人を上回ったことはおそらくなく、これは教育すべきすべての数に対してはほんの少数に過ぎない。この学校で教育された子供が全員プロテスタント教徒であり続けたと仮定しても、住民の大多数にはまったく影響を及ぼさない程度であるが、実情はそうではなかった。旧教の教えに戻った子供の数を知ることにはできないが、少数ではなかったと信じるに足る理由がある。

ところが「大勢の貧しい子供たちに勤労の習慣を身に付けさせ、社会の有益な一員にするというもう一つの重要な目的」はかなえられてきたので「貧民の救済のために公的資金が使われている機関が他にない」ことを考えてあわせても、「この施設が長い間受けてきた法的な保護と援助は、続けるに値する」との結論に至っている⁽⁶⁹⁾。

しかしその後アイルランドの教育に関する調査を行う王任委員会が下院に設置され、「チャー

ター・スクール」についての「徹底的な調査」がついに行われることとなった。1825年に出されたこの委員会の調査報告は学校長、監督官など多数が証言をしているが、ここで初めて私たちは「チャーター・スクール」で育った子供たち自身の証言を聞く機会を得る。15人の証言が残されているが、たとえば父親がプロテスタント教徒で母親がカトリック教徒である18歳のトマス・モイルは調査委員との面接で、「11年前にウェックスフォード州のロス校に入った。母親はまだ生きているが、イングランドにいる父親の生死はわからない。ロス校に8年か9年いた後サントリー校に移り2年経った」ところだと語り、「子供たちは頻繁に暴力を受けたか」との問いに「本当のことを言います、パイン先生はまったくの暴君です」と答え、「先生は仕事のこと、助教師は課業のこと」を理由にして「先生は馬用の鞭で、助教師は棒か杖で」子供たちを殴ると話し、覚えている出来事の一つとして「牛乳が水っぽいと話したジェイムス・ブルックが『九尾の猫鞭』でひどく殴られたのを見た」と話している⁽⁷⁰⁾。

また19歳のジョン・コノリーはカトリック教徒の両親を持ち、9歳の頃クロンターフ校に入ったがそこにいたのは2か月以下で、次にスライゴー校に移って6年いた後、今のサントリー校に來たと話し、スライゴー校では暴力がふるわれるのは毎日のことで、助教師や門番の他、「学校長の子供も加担し、学校長と同じ位ひどい暴力をふるった」と証言している。そして「過剰な暴力がふるわれるのを見たか」との問いに、「ギャラガーという男子のことを覚えています。先生が彼の間違いを見つけてカバ材の棒で殴りましたが、それでは気が済まずに今度は鞭でたたき、彼が泣くのが気に入らないとその後長い間、30分位たたき続けました」と話し、脱走は高い壁があって難しかったのにもかかわらず、多くが脱走を試みたこと、自分の弟も三度試みて三度目にはとうとう脱走してしまったこと、なども話している。また「何かその学校に特徴的な暴力のふるい方はあったか」との問いには「先生が子供たちを鞭で殴った後、喉をつかんで子供が失神しそうになるまで放さないことがあり、私もよくその扱いを受けた」とし、このような光景は「何百回も見た」と答えている⁽⁷¹⁾。

この報告書によれば開始以来「チャーター・スクール」運動のために使われた費用は161万2,138ポンドにのぼり、うち102万7,715ポンドは議会からの補助金であった⁽⁷²⁾。その他にも王室からの報奨金等の資金援助も得ており、投入された公的資金の総額は130万ポンド程度だったと考えられる⁽⁷³⁾。また開校以来すべての施設から奉公に出された子供の数は12,745人だがそのうち、1748年から規則に加えられていた奉公の期間を終えてプロテスタント教徒と結婚すれば5ポンドをもらえるという「結婚持参金」を得た者は1,115人に過ぎなかったとしている⁽⁷⁴⁾。そして「数々の不手際と虐待があるにしても、主な欠点はその間違った原則にある」として「子供たちを親族から引き離す」手法を挙げ、「まったく人工的な環境で生活してきたチャーター・スクールの子供」は、施設を去った後「この耐え難い恐怖の施設で育った結果として、その心は重苦しさに押しつぶされてしまう」⁽⁷⁵⁾と批判している。

この年アイルランド総督の求めに応じて「チャーター・スクール」には新たに子供を受け入れないこととなり、1826年以降は議会からの助成金も徐々に減額されることとなった。また男子は軍隊に入隊させたり、親族に連絡のつく者は援助金と共にその元へ返すなどの措置が取られ⁽⁷⁶⁾、1826年には1,989人いた生徒数も1830年には884人にまで減少した⁽⁷⁷⁾。一方でこの間、1774年から1793年にかけての「カトリック救済法」と1829年の「カトリック解放」を経てカトリック教徒への種々の制限が緩和された後、1831年には宗派によらない初等教育を目指した国家教育制度の開始に伴って「チャーター・スクール」はその幕を閉じることとなる。

3. 終わりに

以上のようにプロテスタント教徒の大きな期待と共に始まり、豊富な資金も得て「この時期のアイルランドにおいて他のどの慈善団体より恵まれていた」⁽⁷⁸⁾ この運動は、「アイルランド人を改宗させるための最も長続きした試み」⁽⁷⁹⁾であったにもかかわらず、失敗に終わった。この施設の残したものは、「アイルランドの貧困層に植え付けられた、彼らの貧しさにつけこもうとする宗教団体への憎しみ」⁽⁸⁰⁾であり、「チャーター・スクール」で育った子供たちには「汚名が着せられ」、「カトリックの大衆文化ではチャーター・スクールは極悪非道の評判」⁽⁸¹⁾を得たのであった。たとえば1749年の物乞いをしている子供を「チャーター・スクール」に送ってよいとする法令から「チャーター・スクールの人さらい」という言葉が生まれて「わがままを言う子供に、チャーター・スクールの人さらいが来るという脅し文句を使うことは、生きた記憶であり」⁽⁸²⁾、1825年の報告書にも「チャーター・スクール」の子供に対する「様々な侮辱的呼び方」があり、一例として『「チャーター・スクールの奴」とはアイルランドでは非嫡出子のことを意味する」ことが記されている。そしてこのような状況のため、奉公先を見つけることも困難になるという悪循環にも陥っていた⁽⁸³⁾。

結局刑罰法も「何か他の方法」も、カトリック教徒が大多数を占めるというアイルランドの状況を変えることはなかった。「半世紀にわたって少しずつ制定された法令の寄せ集め」⁽⁸⁴⁾であった刑罰法に対する評価は、今日も定まらない。「アイルランドのカトリック教徒は宗教的迫害の犠牲者なのか？ 刑罰法の動機は宗教的なものか政治的なものか？ 法は実行に移されたか？ 実行に移す意図はあったのか？ その対象はカトリック教徒の持つ財産か、それともカトリック教そのものか？」⁽⁸⁵⁾という問いは、アイルランド史研究を志す者にとっての永遠の課題である。また「チャーター・スクール」運動の失敗を目にして考えるのは、「宗教改革はなぜアイルランドでは失敗したのか」⁽⁸⁶⁾というもう一つのアイルランド研究の課題である。さらには1831年に宗派によらない初等教育を目指して新制度が導入されたもののそれはすぐに頓挫し、今日でもアイルランドの教育機関は宗派によって分かれているのが通常である。これらについては別に機会を得て検証することにするが、このようにアイルランド史における重要な課題を与えてくれるハーン家に

ついでの研究を、今後もさらに深めていきたいと考える。

注

- (1) 本稿のための調査の一部は Universitas 21 Anniversary Fellowship Program の助成により可能となった。
- (2) 詳細は「ハーン家について思うこと」『へるん』（八雲会編、第41号、2004年）pp.99-101、「ハーン家の由来について」『へるん』（八雲会編、第42号、2005年）pp.114-6、「ラフカディオ・ハーン—アイルランド史の視点から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』（早稲田大学大学院文学研究科編、第50輯、第4分冊、2005年）pp.81-9。
- (3) 大まかな分類ではあるが、アイルランド史研究では12世紀のアングロノルマンによる侵攻以降、宗教改革の時期までにアイルランドに定住したカトリック教徒のイギリスからの入植者とその子孫を「オールド・イングリッシュ」、それ以降のプロテスタント入植者とその子孫を「ニュー・イングリッシュ」と区別する。詳しくは Aidan Clarke, *The Old English in Ireland, 1625-42*, (New York, Cornell University Press, 1966) 等を参照。
- (4) この時代、財産の保護や職業選択の自由を目的に「名ばかりの」改宗をする者は珍しくなかった。詳しくは T. P. Power and Kevin Whelan, eds., *Endurance and Emergence: Catholics in Ireland in the Eighteenth Century*, (Dublin, Irish Academic Press, 1990) 特に Thomas P. Power, 'Converts', pp.101-27, Eileen O'Byrne, ed., *The Convert Rolls*, (Dublin, Stationary Office, 1981) を参照。
- (5) アイルランドではイギリスからの独立戦争（1919-21）後の内戦時（1922-3）に、当時史料が保管されていた建物が破壊されたため、大量の歴史的史料が失われた。今日の National Archives of Ireland の見解では、1919年に編纂された *A Guide to the Records Deposited in the Public Record Office of Ireland by Herbert Wood, Assistant Deputy Keeper of Public Records, Ireland*, (Dublin, His Majesty's Stationary Office, 1919, 334 pages) に掲載されている史料のうち90パーセント程が失われたとされる。また破壊直後の様子については Herbert Wood, 'The Public Records of Ireland Before and After 1922' in *Royal Historical Society Transactions*, 4th series, vol.XIII, 1930, London, pp.17-49に詳しい。
- (6) National Library of Ireland, Genealogy Office, G. O. MS 232, vol.10, p.24.
- (7) George Burtchaell and Thomas Ulick Sadler, eds., *Alumni Dublinensis, 1593-1860*, (Bristol, Thoemmes Press, 2001, Reprinted from the 1935 version), p.385.
- (8) R. B. McDowell and D. A. Webb, *Trinity College Dublin 1592-1952: An Academic History* (Cambridge, Cambridge University Press, 1982), Toby Barnard, *A New Anatomy of Ireland: The Irish Protestants, 1649-1770* (New Haven, Yale University Press, 2003), J. H. White, 'Ireland: 1966-82' in T. W. Moody and F. X. Martin, eds., *The Course of Irish History* (Maryland, Roberts Rinehart, 2001, 4th edition), pp.288-305 他。
- (9) Henry Cotton, *Fasti Ecclesiae Hibernicae: The Succession of the Prelates and Members of the Cathedral Bodies in Ireland*, (Dublin, Hodges & Smith, 1848-78, 6 vols.), Vol.1, Pt. II, The Dioceses of Cashel and Emly, p.112, p.125, and p.170.
- (10) The Church of Ireland Representative Church Body Library, *Biographical Succession List of Kilmore completed by Rev. Canon J. B. Leslie* (transcript, n.d.)
- (11) National Library of Ireland, Genealogy Office, G. O. MS 232, vol.10, p.24.
- (12) ハーン研究ではこの人物が当時のアイルランド財務省の副出納官補佐ジョン・ブラット（John Pratt）の事務官だった「マーカス・ダウリー」ではないかとの指摘があるが、事実がどうかは判然としない。このブラットとダウリーは1725年に背任行為で不正に巨額の所得を得たとの疑惑が浮上している。詳しくは Toby Barnard, *op.cit.*, pp.161-2.

- (13) The Church of Ireland Representative Church Body Library, The Diocesan Council and Derry & Raphoe, ed., *Clergy of Derry and Raphoe by the Ulster Historical Foundation*, (Belfast, Dungalden Press, 1999), pp.302-3.
- (14) National Archives of Ireland, *Index to Marriage Licence Grant Books, Diocese of Dublin 1672-1741*, p.128.
- (15) National Library of Ireland, G. O. 474, Dublin Marriage Licence Bonds.
- (16) Burtchaell and Sadlier, eds., *op.cit.*, p.390.
- (17) H. C. D. Matthew and Brian Harrison eds., *The Oxford Dictionary of National Biography*, (Oxford, Oxford University Press, 2004), vol.26, pp.595-6.
- (18) The Church of Ireland Representative Church Body Library, The Diocesan Council and Derry & Raphoe, ed., *op.cit.*, pp.302-3, Henry Cotton, *op.cit.*, Vol.1, Pt.IV: The Dioceses of Limerick, Ardfert, Killaloe, and Kilfenora, p.413.
- (19) *A Sermon Preached in the Church of Urney, in the Diocese of Derry, on the 11th day of April, 1744*, (Dublin, Peter Wilson, 1744, reproduced by The Gale Group for The Eighteenth Century Collections Online, 以下 ECCO), *A Philippic Oration, Against The Pretender's Son, and his Adherents, Addressed to the People of the North of Ireland*, (Dublin, Peter Wilson, 1745, ECCO)
- (20) *Hints Towards a Natural and Topographical History of the Counties of Sligo, Donegal, Fermanagh, and Lough Erne*, (National Archives of Ireland, M2533, 1739), *Henry's Upper Lough Erne in 1739*, (edited by Sir Charles S. King, Clare, Ballinakella Press, 1987)
- (21) *An Ernest Address to the People of Ireland, Against the Drinking of Spiritous Liquors*, (Dublin, Peter Wilson, 1753, reproduced by The Gale Group for The Making of the Modern World: The Goldsmiths'-Kress Library of Economic Literature, 1450-1850), *A Dram for Drunkers*, (Dublin, Peter Wilson, 1759, ECCO)
- (22) Anthony Dopping, 'Remedies Proposed for the Church of Ireland (1697)' edited by John Brady for *Archivium Hibernicum*, vol. 22(1959), pp.163-73.
- (23) Christopher J. Fauske, *Jonathan Swift and the Church of Ireland, 1710-1724*, (Dublin, Irish Academic Press, 2002), Louis Landa, *Swift and the Church of Ireland*, (Oxford, Clarendon Press, 1954), S. J. Connolly, *Religion, Law, and Power: The Making of Protestant Ireland 1660-1760*, (Oxford, Clarendon, 1995, first published in 1992) 他。
- (24) *A Continuation of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, from the 24th of March, 1737, to the 25th of May, 1738*, (Dublin, George Grierson, 1738, ECCO), pp.35-6.
- (25) 'An Alphabetical Table of the Members of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland' in *An Abstract of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, from the Opening of His Majesty's Royal Charter, on the 6th Day of February, 1733 to the 25th Day of March, 1737*, (Dublin, George Grierson, 1737, ECCO), pp.29-37.
- (26) Kenneth Milne, *The Irish Charter Schools 1730-1830*, (Dublin, Four Courts Press, 1997), p.12, Donald H. Akenson, *The Irish Educational Experiment: The National System of Education in the Nineteenth Century*, (London, Routledge & Kegan Paul, 1970), pp.30-1, Connolly, *op.cit.*, pp.304-5.
- (27) Boulter to the Duke of Newcastle, Dublin, May 7, 1730, in *Letters Written by His Excellency, Hugh Boulter, D. D.* (Oxford, Clarendon, 1769-70, ECCO), vol.2, pp.12-2.
- (28) M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action*,

- (London, Frank Cass and Co. 1964, first published in 1938), pp.233-5, Kenneth Milne, 'The Irish Charter Schools' in *The Irish Journal of Education*, vol.8, no.1, (Summer, 1974), p.13, Joseph Robins, *The Lost Children: A study of Charity Children in Ireland, 1700-1900*, (Dublin, Institute of Public Administration, 1980), p.63.
- (29) *A Copy of His Majesty's Royal Charter, for Erecting English Protestant Schools in the Kingdom of Ireland*, (Dublin, George Grierson, 1733, ECCO).
- (30) 'Rules Established by the Incorporated Society, in Dublin, for Promoting English Protestant-Schools in Ireland', 'Particular Rules for the Regulation of Charter-Schools, to be set up in the Kingdom of Ireland' in *An Account of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, from February 6th 1733, on which Day the Royal Charter was opened, to the 6th of March following*, (Dublin, George Grierson, 1734, ECCO), pp.7-14.
- (31) *An Abstract of the Number of Protestant and Popish Families in the Several Counties and Provinces of Ireland*, (Dublin, M. Rhames, 1736, ECCO)
- (32) Connolly, *op.cit.*, p.43, pp.144-5.
- (33) K. H. Connell, *The Population in Ireland 1750-1845*, (Oxford, Clarendon, 1950), p.25.
- (34) Sir William Petty, *The Political Anatomy of Ireland*, (London, D. Brown and W. Rogers, 1691, ECCO)
- (35) *Journals of the House of Lords, Vol. III, From 1 Geo. II. 1727 To 25 Geo. II. 1752*, (Dublin, William Sleater, 1779, ECCO), p.169.
- (36) これらのほとんどは「生け垣学校」(Hedge Schools)で、多くの場合野外で開かれていたためこのように呼ばれた。実際はより多くの生け垣学校があったのではないかとの推定もある。詳しくは Jones, *op.cit.*, 'The Hedge Schools', pp.259-65, P. J. Dowling, *The Hedge Schools of Ireland*, (Dublin, The Talbot Press, 1935).
- (37) *A Report Made By His Grace the Lord Primate, From the Lords Committees, Appointed to Enquire into the Present State of Popery in the Kingdom of Ireland*, (London, J. Oliver, 1747, ECCO)
- (38) 7 Will.III, c.4 (7 September 1695)
- (39) 9 Will.III, c.1 (25 September 1697)
- (40) J. G. Simms, 'The Establishment of Protestant Ascendancy, 1691-1714' in T. W. Moody and W. E. Vaughan, eds., *A New History of Ireland, Vol. IV: Eighteenth-Century Ireland, 1691-1800*, (Oxford, Oxford University Press, 1986), pp.16-8, Robert E. Burns, 'The Irish Popery Laws: A Study of Eighteenth-Century Legislation and Behavior' in *The Review of Politics*, vol.24, no.4 (October 1962), pp.485-508.
- (41) Connolly, *op. cit.*, pp.280-7.
- (42) *A Brief Account of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Erecting and Promoting English Protestant Schools in Ireland*, (London, published by Order of the Society, 1735, ECCO), pp.9-10.
- (43) Connolly, *op.cit.*, p.305
- (44) Boulter to the Duke of Dorset, Dublin, May 24, 1737, in *Letters, op. cit.*, vol.2, pp.225-6.
- (45) William Henry, *An Appeal to the People of Ireland*, (Dublin, Peter Wilson, 1749, ECCO)
- (46) William Henry, *A Sermon Preached in the Parish Church of St. Werburgh's, Dublin, on Sunday the 4th Day of November, 1753. Being the Anniversary of the Birth-Day of King William the Third of Glorious Memory*, (Dublin, Peter Wilson, 1753, ECCO).
- (47) Jones, *op. cit.*, p.235, Robins, *op. cit.*, p.64.
- (48) William Barnard, *A Sermon Preached at Christ-Church, Dublin, on the 10th day of May, 1752, before the Incorporated Society, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, ... With a continuation of the Society's proceedings, to the 25th of March, 1752*, (Dublin, S. Powell, 1752, ECCO), p.32.

- (49) Edward Young, *A Sermon Preached at Christ-Church Dublin, on the 1st of June, 1766, Before the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, With a Continuation of the Society's Proceedings to the 25th of the March, 1766*, (Dublin, S. Powell, 1766, ECCO).
- (50) Philip Fletcher, *A Sermon Preached Before the Society, Corresponding with the Incorporated Society, for Promoting English Protestant Working-Schools in Ireland, At their General Meeting in the Parish Church of St. Mary le Bow, on Wednesday, May 2, 1759*, (London, J. Oliver, 1759, ECCO), p.60.
- (51) John Green, *A Sermon Preached Before the Society, Corresponding with the Incorporated Society, for Promoting English Protestant Working-Schools in Ireland, At their General Meeting in the Parish Church of St. Mary le Bow, on Tuesday, March 17th, 1767*, (London, J. and W. Oliver, 1767, ECCO), p.54.
- (52) Robins, *op. cit.*, p.66, Milne, *op. cit.*, (1997), p.45.
- (53) この飢饉の経験からジョナサン・スウィフト (1667-1745) は1729年、「子供を食糧にすればアイルランドは貧困から逃れられる」とする *A Modest Proposal* を発表している。
- (54) じゃがいもの不作が初めて原因となったこの飢饉では、「殺戮の年」(bliadhain an áir) と呼ばれることとなった1741年に20万から40万人 (人口1000人あたり50-70人) の死者を出したと推定される。J. L. McCracken, 'The Social Structure and Social Life, 1714-60' in Moody and Vaughn, eds., *op. cit.*, pp.33-4.
- (55) Jones, *op. cit.*, pp.242-4, Robins, *op. cit.*, p.69.
- (56) Robins, *op. cit.*, p.66.
- (57) 23 Geo. II, c.11, *Statutes at Large, passed in the Parliaments held in Ireland*, Vol.7, pp.45-6, (Dublin, Boulter Grierson, 1765, ECCO).
- (58) *A Continuation of the Proceedings of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, From the 25th of March, 1740 to the 25th of March, 1742*, (Dublin, George Grierson, 1742, ECCO), p.15.
- (59) *A Brief Review of the Rise and Progress of the Incorporated Society in Dublin, for Promoting English Protestant Schools in Ireland, From the Opening of His Majesty's Royal Charter, February 6th, 1733 to November 6th, 1743*, (Dublin, George Grierson, 1744, ECCO), p.10.
- (60) *Votes of the House of Commons, in the Sixteenth Session of the Present Parliament of Ireland*, (Dublin, Abraham Bradley, 1757, ECCO), November 7th, 1757, pp.76-7.
- (61) *Ibid.*, November 8th, 1757, p.89,
- (62) Milne, *op. cit.*, (1997), p.44-5.
- (63) June 11, 1743, *Faulkner's Dublin Journal*, quoted in John Brady, *Catholics and Catholicism in the Eighteenth-Century Press*, (Maynooth, Catholic Record Society of Ireland, St. Patrick's College, 1965), pp.64-5.
- (64) September 16, 1771, *Hibernian Journal*, quoted in *Ibid.*, p.145.
- (65) Milne, *op. cit.*, (1997), p.145-6.
- (66) John Howard, *The State of Prisons in England and Wales, with Preliminary Observations, and An Account of Some Foreign Prisons and Hospitals*, (Warrington, William Eyres, 1784, The third edition, ECCO), pp.208-9.
- (67) John Howard, *An Account of the Principal Lazarettos in Europe; with Various Papers Relative to the Plague: Together with Further Observations on Some Foreign Prisons and Hospitals; and Additional Remarks on the Present State of Those in Great Britain and Ireland*, (Warrington, William Eyres, 1788, ECCO), pp.101-24.
- (68) Report on the State of the Protestant Charter Schools of This Kingdom, Monday 14th, April, 1788, in *The Journals of the House of Commons, of the Kingdom of Ireland*, Vol.25, (Dublin, James King and

Abraham Bradley King, 1788, ECCO).

- (69) *Commissioners of the Board of Education in Ireland, Third Report*, House of Commons, British Parliamentary Papers, 1809(142) VII, pp.24-5.
- (70) *First Report of the Commissioners on Education in Ireland*, House of Commons, British Parliamentary Papers, 1825(400)XII, Appendix, No.129, Examination of Thomas Moyle, On Oath, Saturday, 30th, October, 1824, pp.274-7.
- (71) *Ibid.*, Appendix No.80, Examination of John Connolly, John Doyle and Robert Robinson, Thursday October 28th, 1824, pp.153-6.
- (72) *Ibid.*, Appendix No.172, pp.334-7.
- (73) Robins, *op. cit.*, p.99.
- (74) *First Report*, Appendix No.172, pp.334-7.
- (75) *Ibid.*, pp.29-30.
- (76) Robins, *op. cit.*, p.98.
- (77) *Return of Number of Children in Charter Schools of Ireland, 1826-1830*, House of Commons, British Parliamentary Papers, 1831(157)XV
- (78) Robins, *op. cit.*, p.63-4.
- (79) Marianne Elliott, *The Catholics of Ulster: A History*, (New York, Basic Books, 2001, first published in 2000), p171-2.
- (80) Jones, *op. cit.*, p.242, Robins, *op. cit.*, pp.99-100.
- (81) Elliott, *op. cit.*, p.172.
- (82) W. K. Sullivan, 'From the Treaty of Limerick to the Establishment of Legislative Independence, 1691-1782' in R. Barry O'Brien, ed., *Two Centuries of Irish History 1691-1870*, (London, Kegan Paul, 1907, first published in 1888), p.52-3.
- (83) *First Report*, p.27.
- (84) Connolly, *op. cit.*, p.263.
- (85) R. E. Burns, 'The Irish Penal Code and Some of Its Historians' in *The Review of Politics*, vol.21, (1959), pp.276-99.
- (86) Nicholas Canny, 'Why the Reformation Failed in Ireland: Une question mal posée' in *Journal of Ecclesiastical History*, vol.30, no.4, (1979), pp.423-41, Karl Bottigheimer, 'The Failure of the Reformation in Ireland: Une question bien posée' in *Journal of Ecclesiastical History*, vol.6, no.2, (1985), pp.196-207, S. G. Ellis, 'Economic Problems of the Church: Why the Reformation Failed in Ireland' in *Journal of Ecclesiastical History*, vol. 41, no.2, (1990), pp.239-65.